

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 94

2024年 12月



海の近く、下水に隣りあった避難所のテントに住むパレスチナ人（2024年8月、ガザ地区中部にて）

世界情勢は平和への光をますます見えにくくしています。実現したイスラエルとイスラム教シーア派組織ヒズボラとの停戦も、イスラエル×イランの対立が解消しない限り、はかないものと言われていきます。ガザでは今も空爆がくりかえされ、支援物資の搬入もままならず、さらに略奪などもあって、ほとんどの人が飢餓状態だそうです。すでに45,000以上の命が失われ、数知れぬ人々が負傷しています。学校や医療施設も破壊されました。

親や友だちを失い、自らは障害を負い、飢えと渇きに苦しみながら生きる子どもたち。彼らがこのまま恨みを持ち続けるとしたら、同じ悲劇が必ず繰り返されるでしょう。生き延びることは先決ですが、復興期には彼らの心のケア、そして平和の学びがどれほど必要になるのでしょうか？

支援者の皆様からは、この14ヶ月間本当に寛大なお力を頂いています。ご支援金は順次エルサレムのカトリック総大主教区のピッツァバッラ枢機卿様にお届けしています。おかげさまで教会とその周辺に避難している人々が、命をつなぐことができました。彼らは皆様のご支援に心から感謝しています。

井上 弘子



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502

Email ispalejpn@gmail.com

TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<https://seichi-no-kodomo.org>

ラテン大司教区、ガザへ緊急人道支援

エルサレム、ラテン大主教区のホームページより



ガザの聖家族教会に到着した救援物資

ピッツァバツラ枢機卿のガザ訪問により

エルサレムのラテン大主教区は、マルタ騎士団修道会および国際NGOマルティーザー・インターナショナルと協力して2024年5月、緊急な人道支援を必要とするガザのキリスト教徒コミュニティに対し、大規模な救援活動を開始しました。

この事業は、エルサレムのラテン（カトリック）総大主教区のピエルバティスタ・ピッツァバツラ枢機卿による異例の地区の教会訪問によって、5月16日に始まりました。この歴史的な訪問は、数カ月にわたる慎重な準備と調整によって可能となったもので、総主教庁による強力な救援任務の開始を告げるものとなりました。この訪問中に、ガザ市内の聖家族教会の敷地内に避難している地域住民に必需品の支援物資が配布され、一刻も早い支援を必要としていた人々に届けられました。

イスラエル軍による攻撃を受けるかもしれないという危険がある中で物資を運ぶという困難な課題にも関わらず、ラテン（カトリック）総大主教区は重要な援助物資の輸送を手配し、ガザ北部の中心部へ物資を無事に送り届けて分配することができました。出荷から最終的な配達まで、あらゆる段階で細心の注意を払って調整し、支援を必要とする人々に確実に届けられるようにしたのです。

この事業は9月の段階で、20トンの新鮮な果物と野菜、40トンの食品および衛生用品を配送するという成果をあげました。10月までにこの数字は2倍になり、40トンの生鮮食品がコミュニティに届け

られるようになりました。そして11月、この救援活動はキリスト教徒コミュニティと聖家族教会周辺地域の1,000世帯以上に重要な支援を提供し、各世帯に20キログラムの保存食を配ることができました。同時に、5,000世帯にそれぞれ5キログラムの新鮮な果物と野菜を提供できました。

この事業により合計約140トンの援助物資が配布され、約40,000人が恩恵を受けました。この人数は、約200万人の住民が大量避難した後もガザ北部に残った人口の10%にあたります。将来を見据えて、ラテン（カトリック）総大主教区はパートナーと協力して、この重要な使命を維持することに尽力します。また、月に2回の輸送で、それぞれ100トンの必需品を運ぶ計画が進行中です。さらに、聖家族教会の敷地内に医療施設を設立して緊急の医



配給された野菜と果物の袋を受け取って喜ぶ人。

療ニーズに対応できるようにするほか、学校を再開できるようにする取り組みも進められています。

ピッツァバツラ枢機卿は、この使命を推進することは道徳的および宗教的義務であると強調し、次のように述べました。

「私たちはガザの兄弟姉妹たちの深い痛みを共有しています。彼らは1年以上にわたって、すべてを失うという痛切な現実にも耐え続けているのです。この救援活動は、彼らに必要なものを供給するだけの

ものではなく、私たちの同胞に対する道徳的義務でもあります。それは『私たちはあなた方に寄り添い、あなた方の苦しみを受け止め、決してあなた方を見捨てない』と伝える行いなのです。」

この、必要不可欠な物資を届け、その安全な輸送を確保するという大きな事業に傾ける努力は、ラテン（カトリック）総大主教区が、深刻な危機的状況にあるガザ住民の回復と生存を守ろうとする取り組みへの、揺るぎない意志を反映しています。



支援物資の平等な配給をパソコンで管理。



仕分けされ袋詰めされて、配給の準備が終わった支援物資。



たくさんのボランティアが袋詰めを手伝う。



たくさんのボランティアが袋詰めを手伝う。



物資の配給を待つ人々の長い列。



新鮮な野菜や果物をカートに積んで家路を急ぐ。

平和の架け橋プロジェクトと私

ヤクーブ・ガザウィ (NPOエルサレムスタッフ)

私は19年前に、平和の架け橋プロジェクトに初めて参加し、その後グループリーダー、さらには全体のまとめ役となり、プロジェクトの一員として貴重な経験をさせてもらいました。

今年(2024年)は、昨年10月のイスラム組織ハマスによる奇襲にイスラエルが反撃して始まった戦争という状況の中で、実のあるプロジェクトができるとは思えませんでした。昨年夏は、まだ戦争がなかったのにイスラエル人とパレスチナ人の参加者の間に厳しい雰囲気があり、時折、理解と友情を築くのは非常に難しいと感じることもありました。

今年は、打ち続く戦争と、人々が日々直面している恐ろしい光景や不当な行為という戦争がもたらす惨禍があるにもかかわらず、プロジェクトは完全に成功しました。参加者たちのおかげで、パレスチナ人、イスラエル人の双方に、より美しく、より良い未来があるという希望を持つことができました。お互いの意見に耳を傾け、尊重し合う人々がまだいることを示してくれたのです。このプロジェクトに参加し、その成功に貢献して下さったすべての方々に感謝します。

私は今回、長崎で私たちが訪れた場所の持つ影響力に驚かされましたし、参加者が初日から交流しようとする姿勢にも驚かされました。私は数カ月間に長崎の原爆資料館を2度訪れましたが、そこで強く印象付けられたのは、忘れないことの大切さと同時に、赦すことの大切さでした。もちろん、戦争の悲惨な側面、戦争がもたらす結果、戦争の代償を忘れてはなりません。しかし残念なことに、私たち人間は赦すということにおいては弱い存在です。私がチャリティコンサートで述べたように、赦すためには復讐するよりもはるかに勇気がいります。私たちは勇気ある人間となり、お互いに赦しを求めなければなりません。なぜなら、赦しによって私たちは人間になるからです。戦争においては、私たちと動物界との間に違いはありません。動物界では、適者生存と強者が支配するルールが適用されています。私たちは互いに支え合い、弱者を助け、亡くなった人々を大切にする必要があります。

ここで、オルガンコンサートの成功に貢献して下さったすべての方々に感謝申し上げます。チャリティコンサートは今年、九州、関西、首都圏で計12回開きました。行く先々で皆さんの寛大さ、献身、平和への愛に圧倒されました。この輪を広げていく必



8月9日、長崎原爆平和式典に参加し、平和のために祈るプロジェクトのグループ。左から、ヤクーブ、ワシム、村上副理事長、一人おいて中村神父。

要があります。より多くの人に関わることで、私たちは平和のメッセージと和解の経験をより広めることができるでしょう。コンサートには多くの人々が訪れ、NPOとしての私たちの使命がいかに重要であることを示してくれました。最も重要なことは、私たちが自分たちの活動にどれだけ信念を持っているかということです。

NPO理事長の弘子さん、19年前にイスラエルとパレスチナの若者たちを日本人を交えて交流させるという構想を思い立ってくださってありがとうございます。この構想に基づく平和の架け橋プロジェクトは、参加する若者たちに、心を開き、思ったことを互いへの尊重と思いやりを持って自由に語り合う機会を与えてくれます。このプロジェクトが継続し、私たちが蒔いた平和の種が実を結び、戦争が終わったらすぐに収穫できるようになりますように。

最後にお問い合わせがあります。イスラエルとパレスチナが隣り合わせで共存し、2つの国家として、あるいは平等な権利を持つ1つの国家として、より良い未来を築くことができるよう、祈りと希望を絶やさずにご協力ください。どのような結論が出るにせよ、両民族は互いに平和的に共存するべきです。

2009年プロジェクトで植えたオリーブの苗が、今は実をつけるまで成長した。「自分はこの木と共に育った」とヤクーブ。



パレスチナの子どもたちに平安を

ラハド・シオ (ベツレヘム在住・観光ガイド 平和の架け橋プロジェクト2023、2024に参加)

クリスマスシーズンが近づくにつれ、世界各地ではお祭り気分が準備が進められているのに対し、ヨルダン川西岸の子どもたちは厳しい現実と直面しているという明暗が、ますます明らかになってきます。ベツレヘムを含む西岸地域では、継続的な紛争と不安定が家族の日常生活に深刻な影響を与えています。この時期、クリスマスを迎える喜びと期待に満ちているはずの子どもたちは、食べ物や住まい、安全など生きていくのに欠かせないものを奪われていることを思い知らされるのが、よくあります。紛争による経済的負担により、多くの親が子供たちに最も簡単なお祝いの食事さえ提供できなくなっています。

西岸では、イスラエル軍により移動が制限され生活の糧を得るのが難しくなるという、長年続いている問題のために、状況がますます悪化しています。家族は十分な栄養を確保するのに苦労しており、多くの家族が援助に頼っていますが、要求を満たすに

は十分でないことがしばしばです。子どもたちへの心理的負担は、クリスマスシーズンに味わえるはずの身体的な快適さを奪われるだけでなく、戦争で荒廃した環境の中で生活するという精神的苦痛を受けることによっても、深刻なものになります。このように、本来あるべき権利を奪うことは、子どもたちの人間としての発達と幸福を損ない、クリスマスシーズンをはるかに超える長い時間続く傷跡を残します。

こうした子どもたちの窮状に対処するには国際的な関心が不可欠です。世界中の多くの人々がクリスマスを盛大に祝う一方で、ヨルダン川西岸の子どもたちは依然として不安と恐怖の状態にあります。子どもたちの権利と福祉の擁護は主張し続けなければなりません。何故なら、すべての子どもたちに、その状況に関係なく、子どもにふさわしい喜びや安全、基本的権利を経験する機会を保証することは、人類にとって不可欠なことだからです。

聖地からの便り 当NPOの支援先学校から送られてきた写真です



聖ヨセフ学院の生徒：左から、ロイ、ジョージ、ビシャラ、ラヴィニア、ミノダ。
「皆様の学費援助をお待ちしています！」



エフェタ聴覚障害児学園での図工教室 (ベツレヘム)



結婚外で生まれた子どもを殺すという【名誉殺人】から救われた幼児を育てる「飼い葉桶乳児院」のサマーキャンプ。



戸外に捨てられて、「飼い葉桶乳児院」に受け入れられた新生児。

戦争犯罪容疑 ICCがネタニヤフ首相に逮捕状

村上 宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

国際刑事裁判所（ICC）が11月21日、イスラエルのネタニヤフ首相とガラント前国防相に、戦争犯罪や人道に対する犯罪の容疑で逮捕状を出しました。イスラム組織ハマスの軍事部門トップであるデイフ氏に対しても同じ容疑で逮捕状を出しました。

ICCは集団殺害犯罪、人道に対する罪、戦争犯罪に問われる個人を訴追する国際的組織ですが、独自の法の執行機関などは持っておらず、逮捕状の執行や、被疑者の引き渡しについては加盟国による協力を依存しています。ところが国連安保理常任理事国5か国のうち加盟しているのは英仏のみで、米国、ロシア、中国は加盟していないというのが実情ですから、強制力には限界があります。

「市民を攻撃・人道支援妨害」

ICCによる逮捕状としては、2022年2月にロシアがウクライナへ侵攻して以降、ウクライナの子どもたちをロシアへ強制移送させた戦争犯罪の容疑があるとして、プーチン大統領に出した例があります。そのプーチン氏がこの9月にモンゴルを訪問した際、モンゴルは加盟国でありながら逮捕どころか豪華な式典で歓迎しました。ICCの執行力の欠如を象徴するものです。

そして今回のネタニヤフ首相らに対する逮捕状についてバイデン米大統領はすぐさま「言語道断」と非難し、責められるべきはイスラエルではなくハマスだという考えを強調しました。ちなみにICC検察局は、2023年10月にイスラエルを襲撃したハマスの最高幹部らに対しても戦争犯罪などの容疑で逮捕状を請求していましたが、ハニヤ元政治局長や戦闘指揮官のシンワル氏らはイスラエルにより殺害されたことで審理を終了、死亡が確認されていないデイフ氏に逮捕状を出したということです。

今年5月に逮捕状を請求したICC検察局は、ネタニヤフ、ガラント両氏について、ガザで意図的に市民に対する攻撃を指示したり、人道支援物資の提供を妨害し飢餓を引き起こしたりした行為に責任がある、としています。主任検察官の声明には「いかなる軍事目標を持っていたとしても、民間人の死、飢餓、多大な苦痛を意図的に引き起こしたことは犯罪である」とあります。これを受けて予審裁判部というところで審理をし、このほど逮捕状を出したという運びです。

批判をすれば「反ユダヤ的」

これに対するイスラエル首相府の反応は「反ユダヤ的な決定」という非難でした。当コラムでは何度も指摘してきました。人種差別とは無関係の、イスラエルという国家の政策に対する批判であっても「反ユダヤ」という言葉で封じようとする論法には、きちんと反論すべきではないかと思います。

米国でも、多くの大学で若者たちが、ガザの人道状況に心を痛めてイスラエルによる攻撃を非難するデモや集会を実施したのに対し、イスラエルを支持する大学への資金供与者から「反ユダヤ主義的行為を放置している」と非難されて辞職に追い込まれた学長が何人も出ました。反ユダヤ主義が蔓延している時代や環境の中にいたわけではない若者が、ユダヤ人がしたことだからではなく、圧倒的な武力で多数の民間人を殺害するイスラエル軍・政府がしていることを批判したものです。

欧州連合（EU）の外相に当たるボレル外交安全保障上級代表は、ICCの決定は政治的なものではないと強調し、「ガザでの悲劇を止めなければならない」と述べています。カナダのトルドー首相も、ICCの全ての判断に従うと表明。英首相報道官は、英国がICCの独立性を尊重するとの立場を述べました。米国がネタニヤフ氏に対するICCの追及に反対する一方、ロシアのプーチン大統領に対する逮捕状は支持していることについて、中国は「都合のいいときだけ国際法を利用し、二重基準を採用している」と非難していますが、中国の言葉を借りなくても二重基準は追及されるべきでしょう。

平和、テレジンの子らの願い

11月1日の朝日新聞に、ナチス強制収容所のことを伝えてきた作家の野村路子さんの話が載っていました。ホロコーストを生き延びた友人と会うため、チェコを訪れた時のことです。野村さんは、第2次世界大戦中にナチス・ドイツが旧チェコスロバキアに設けたテレジン強制収容所を訪れた時、子どもたちが描いた絵に出会い、日本で紹介する活動を続けてきました。ホロコーストの生還者と交流し、イスラエルも繰り返し訪ねたそうです。ハマスの急襲とイスラエルのガザ攻撃に衝撃を受け、すぐに知り合いにメー

ルを送った中の一人、ディタ・クラウスさん(95)が、今回チェコで会った人でした。

野村さんが「多くの子どもたちの命が奪われていくガザの現状は悲しい」などと書き送ったのに対し、返ってきた言葉は激しいものだったそうです。

「日本ではパレスチナ寄りの情報しかないのか？

あの日、ハマスは多くの赤ちゃんを殺し、その親たちを拉致した」「イスラエルの行為は自分たちを守る正当なものだ」

野村さんは、自分はどちらの味方でもなく、過酷な体験をした彼女がなぜ「子どもたちの命を大事に」という思いを共有してくれないのかと、悲嘆にくれたといいます。

87歳になる野村さんは、年齢的に最後になるかもしれないと思いながら今年6月、チェコやポーランドを訪れました。プラハでディタさんと再会したものの、ガザを巡る考えに変化はなさそうなので、ケンカ別れを避けるために踏み込んだ話はしなかったとのこと。「収容所で絵を描いた子どもたちは、きっと平和を望んでいるはずなのに…」と思う野村さん。できることは、テレジンの子どもたちの願いを伝え続けることしかないと言ったそうです。

トランプ旋風、勢いづく右派

ガザ発の情報からは、人道的危機の深刻化が伝わってきます。かつてユダヤ人が追い込まれたのと同じ悲惨な状況ではないかと思えてくるのですが、イスラエル側からは「自分たちを滅ぼそうとするハマスから守る正当な戦いである」という被害者の論理しか聞こえてきません。停戦が実現したとしても、建物が破壊されがれきになったばかりでなく、地面しか残っていない土地での生活再建は、可能なのかと疑いたくなるほどです。

そんな中でイスラエルから聞こえてくるのは「ガザ再入植」という極右閣僚ら強硬派の主張です。ガザにもかつて、ユダヤ人入植地がありましたが、治安維持の面で負担が大きいため、2005年に21か所あった入植地を全面撤去しました。それを復活させようというのです。再入植は極論としても、ガザ北部ではハマスを追い詰めるため一帯を包囲し、住民を強制的に避難させて支援物資を入れさせない作戦がとられる可能性もあるそうです。

イスラエルはガザでの支援活動の中心を担っている国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)の活動に協力する協定を破棄したため、既に破綻している医療活動の崩壊や飢餓の激化の恐れがあります。米大統領にトランプ氏が返り咲いたことも、懸念材料の一つです。前政権時代の2018年にUNRWA支援を打ち切った「実績」があるからです。その前年の米国の拠出額は3億6千万ドル以上でした。

大統領時代のトランプ氏は、国際的にはイスラエルの首都として認知されていないエルサレムに米大使館を移したり、イスラエルが占領地ゴラン高原(シリア領)を一方向的に併合宣言したのを認めたりと、イスラエル支持一辺倒の姿勢を取り続けました。再登場によりイスラエルの右派・強硬派が勢いづく、ガザ攻撃がさらに強まることや、再入植論の高まりもみられます。

トランプ旋風がガザ支援を吹き飛ばさないように祈りたいものです。



支援金の自動払込みサービス

ご好評を頂いている自動払込みサービス。まだの方はぜひご利用ください。

- * 郵便振替、クレジットカード、どちらでも可能です。
- * 銀行や郵便局へ、毎回払込みに行く手間が省けます。
- * いつからでも、いくらからでも簡単に始められます!

お申込み・お問合せは

当法人事務局 **03-6908-6571**

または **042-636-9218** (中山)

遺贈・相続寄付をご検討の方へ

当法人では遺産・相続財産のご寄付も、ありがたく頂戴しております。将来、平和の担い手となる聖地の子どもたちの教育支援や国際交流事業などの活動に使わせていただきます。

詳しくは当法人事務局までお問い合わせください。

TEL.03-6908-6571

TEL.090-6538-3255(#上)

分離の壁の「芸術」

ベツレヘムの街を取り囲む「分離の壁」は、イスラエル側はただ灰色の高い壁が延々と続いているだけだが、内側、つまりベツレヘム側は、たくさんの絵で埋め尽くされている。有名なバンクシーの絵も。



①有名人の肖像画が並ぶ壁。中央は2022年にヨルダン川西岸地区で射殺されたアルジャジールの記者、シリーン・アブアクレ氏。②壁に描いた穴の奥に、行くことができないエルサレムの街とアル・アクサ モスクが③「パレスチナに自由を！」などのスローガンが所狭しと描かれている。④イエスを抱いた聖母マリア。⑤2人の天使が壁をこじ開けようとしている。⑥「アンネの日記」で有名なアンネ・フランク。

平和の架け橋 PROJECT 2024

プロジェクト2024での一コマ



①「恵の丘」原爆ホームの聖堂で、築地重信氏の被爆体験をお聴きました。②中村満神父とともに、長崎・西坂に。「二十六聖人記念教会」を訪問。③8月8日原爆殉難者慰霊式典で、2005年の「平和の架け橋プロジェクト」時に関わって下さったアメリカ人女性と19年ぶりに再会！彼女は今も核廃絶の活動を続けている。④浦上天主堂にて。「被爆のマリア」松明行列を控えて。左からクレール、ラハド、ヤクーブ。

写真撮影：ヤクーブ・ガザウィ、川野由起、三井潔、三島陽、飼い葉桶乳児院、エフェタ聴覚障害児学園、エルサレム・カトリック大主教区、エルサレム連帯事務局